David K. Reynolds, Ph.D.
2019

第１部

４．王にふさわしい人

昔々、自分が皇子であることにとても満足している王子がいました。いつか父親が退任して自分が王位につくとわかっていましたが、王子はその日がくるのを恐れていました。

「父上、私はほんの皇子にすぎません。姉妹がたくさんいるので、彼女たちの一人に国を支配させてください」。

「国民は私の息子が国を支配すると期待しているのだよ。なぜ自分の運命にあらがうのかね」。

「私はとても良い皇子です」と若者は答えました。「王子としてすることには丈ています。戦闘で屈することなく持ちこたえて、かわいい娘を口説いて、夜明けまで踊って、飲んで、他のものに劣らず馬に乗ることができます。私は王という人ではありません。王になる人は誠実でなくてはならず、賢明で正しくあらねばなりません。国王は私以上にそのことをご存知です。私は王になり得ません」。

国王はただ笑っただけでした。

その年の暮れに国王が病気になるという事態が起きました。病は何カ月間も長引きました。国王が息子に権力を譲り渡そうとしていると噂されました。

皇子はパニックになりました。「私は王になるための準備などできていない！」と悲痛な声で叫びました。「他の人に数年間引き継いでもらえないか。議会にかけるのはどうか。母が生きていたら、女王として国を支配できたのに。おお、自分は何を考えているのか、どうするべきなのか…」。

戴冠式式典の二日前に宮殿中は大騒ぎでした。皇子は自分の部屋に閉じ込もってしまい、ドアの外に出るのを断ったのです。

この悲劇的なニュースを聞くや否や、王はすぐにグランドの魔法使いを伏せっているベッドに呼びつけました。王は年をとった男の目をまっすぐに見て、問題を処理するように言いました。グランドの魔法使いはうなずいて、マントをひるがえして去りました。魔法使いは正に何をどうすべきか知っていました。なぜなら現在の君主が王位につく直前に、まったく同じような事態が40年前に起こっていたのです。

グランドの魔法使いは食事を載せる盆を左手に持って、皇子の部屋のドアをノックしました。

「あっちに行ってください」と部屋の中から叫び声がします。「陛下、食事をお持ちしました」。

「何も食べたくない、あっちへ行って！」。

「ですが王子、食事といっしょに飲む王家の薬もお持ちしました」。

「王家の薬？」ドアの近くから声がしました。

「もちろん、陛下を統治者にする薬です」グランドの魔法使いの声はすでにささやき声ではありません。

「陛下は王家の薬を飲まずに君臨することはできません」。

「私はそのようなことは聞いたことがないが」。

「そしてどうか、王子、このことは他の誰にも話してはなりません」と年とった男がささやきました。「もしこのことが知れたなら、皆が薬を飲んで、君主になりたがることになります」。
好奇心と希望でいっぱいになり、王子はそっとドアを開けて、ホールをのぞきました。
「早く、中に入って」。
グランドの魔法使いは盆を手に王子の間に素早く入りました。
「わかった、薬はどこにあるのか」と王子は要求しました。
「それはそこ、陛下のお盆の中央にあるビンの中にあります。しかし、薬を飲まれる前に慎重にラベルの服用注意書きを読まれることが一番です」
「あなたはもう下がって良い」と王子は顔を背けて、手に魔法のビンを持ってベッドに座りました。
「はい、陛下」と言って魔法使いは部屋から出て行きました。

王子はビンのラベルを熱心に読みました。ラベルには：「王家の薬―それぞれの君主によって国王の後継者としての準備が整えられる。中にある指示を注意深く読むこと」。
王子はビンからガラス製の栓を引き出して、中を覗きました。１枚の紙と大きな白い錠剤１つが彼の目を捉えました。
紙は処方箋に違いないと思いました。処方箋を広げた途端、王子は戴冠式の祝宴会場が浮かびました。彼の心の目には祝宴のテーブルの上座に堂々と立って王国に乾杯する自分の絵が浮かびました。落ち着いた、自信のある、完璧な王…。

２日後に戴冠式は何事もなく行なわれました。法廷は新しい王の素晴らしい誕生にざわざわとざわめいていました。賢く、カリスマ的な君主の長期の見通しに庶民は大喜びしました。
そうそう、薬のこと…。王子の震える指が紙を広げてみると、そこには父である国王の筆跡がしたためられていました。

―息子よ
『かつてこのような権威にたいして準備ができている者などどこにもいない。王らしい気持ちになる者もいないのだ。一人の人間として王という人になるのだよ。そのうち、他の君主と同じように、楽に王冠をかぶるようになるだろう。
瓶の中には魔法の薬は入っていない。錠剤はすごく苦いハーブから作られている。飲み方は薬の苦みに慣れるまで口に含み、苦みに慣れたら、飲み込みなさい。以上』　―そなたを愛する父より

……

何らかの仕事をする際に他の人たちは自信があるように思えるのに、自分が心もとない時があります。魔法の薬（教育、安定した仕事、よき伴侶、経済力など）が自信を与えると思います。しかし、自信は何か仕事をして成功した後に来ます。する前にはありません。

新学期の始まり、新しいクラスメイトに会う、新天地に引っ越す、新しいパートタイムの始め、教習所で車を運転するときなどは自信がなくて当然です。新しい仕事に取り組んでから、しばらくして自信は自然にわきます。（アメリカ・オレゴン州ＣＬセンター所長）

目次へ戻る